

井上紅梅の養家と宮田芳三について

——井上紅梅に関する事跡研究の一環として——

勝 山 稔

緒 言

筆者は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「戦前期において支那愛好者が果たした文化受容活動の実証的研究」の一環として、戦前期の支那愛好者・井上紅梅（本名・井上進）の事跡研究に向けた整理収集を進めている。

既に一連の拙稿^{〔一〕}でも述べている通り、現在日本で『西遊記』や『三国志通俗演義』そして『水滸伝』が親しまれ、広く人口に膾炙しているのは、大学に所属する中国古典小説研究者の翻訳活動によるものではなく、井上紅梅や伊藤貴麿、そして平岡龍城を初めとする明治から大正時代に活躍した支那愛好者の尽力による事が明らかになっている。

しかし、これらの支那愛好者の受容活動に関する先行研究で、異句同音に指摘されるのは、彼らの事跡に関する資料の決定的な不足である。

殊に白話小説の翻訳で有名な井上紅梅については、特にその傾向が強く、例えば紅梅の生涯について調査研究を行った三石善吉氏も、紅梅を「謎の人物」と評している。そして「第一、生まれた年も死

んだ年も正確にはわからない。……以下に述べる生涯は、私の質問に詳細に回答して下さった増田渉氏の手紙、及び紅梅の著作などから構成したものであるが、まだ謎の部分があまりにも多い」^{〔二〕}と述べている通り、彼の生涯の全貌については不明点が多く、紅梅の正確な生年も没年さえも判らないという有様である。

そこで筆者は、これら文化受容活動を支えた支那愛好者・井上紅梅の事跡を解明すべく、これまで寺田寅彦の日記や著作に記録された紅梅の事跡や、紅梅主宰の支那風俗研究会の機関誌『支那風俗』についての基礎研究を行っているが、本稿では国立国会図書館（東京本館・関西館）で発見した明治四四年刊『諸官省用達商人名鑑』所載の井上商店に関する資料から、紅梅の文学活動に大きな影響を与えた宮田芳三^{みやたよしぞう}について検討することとしたい。

一 『諸官省用達商人名鑑』所載の井上商店について

井上紅梅について言えば、彼が上海で支那風俗研究会を発足した後については比較的まとまった資料が残っているものの、彼の幼年期から青年期については、まだ多くの謎に包まれている。

この時期の紅梅に関する資料としては、(1) 紅梅自身による随筆や回想、(2) 親友であった寺田寅彦の日記があるが、どちらも資料的制約が少なくない。

例えば寺田の日記は、寅彦が高知から上京し、井上家で下宿を始めてからの記録であり、最も早い記録でも明治三四年一月で、当時紅梅は既に二一歳となっている。そのため、幼年時代から少年時代にかけての紅梅については、本人自身の随筆^{【三】}や後年の回想^{【四】}が唯一の資料であった。

それによると、紅梅は明治一四年に貿易商の家に生まれたという。そして実父は三八歳で没し、祖母宅に引き取られたこと。そして、祖母の隣人の紹介で陸軍省の御用商人と縁組みが纏まり、七歳で銀座尾張町の「井上商店」を經營する井上安兵衛の養子として井上家に招かれたことは知ることができる。しかしながら、紅梅の随筆、そして寅彦の日記にも、紅梅の養父が經營する井上商店が如何なるものであったのかは、殆ど記録が残っていない。

紅梅が、後に中国文化に開眼する契機となったのは、彼の上海渡航(大正二年秋)と上海日日新聞への入社(大正四年秋)である^{【五】}。しかし、その上海渡航の発端となった井上商店内の「お家騒動」^{【六】}については、当事者である紅梅自身も多くを語っていない。そのため、紅梅が白話小説翻訳をライフ・ワークとする以前において、資料的空白の最も大きなものが、この井上商店の問題であった。

井上商店店員で、後に井上安兵衛を襲名する宮田芳三については、従来井上紅梅に関する資料に断片的に言及されていたが、その資料的欠落を埋めるものとして、筆者は国立国会図書館所蔵『諸官省用

達商人名鑑』に見える井上商店の記録を発見した。

本シリーズは、(1) 山口晋一『諸官省用達商人名鑑前編』(運輸日報社、明治四三年九月)、(2) 山口晋一『諸官省用達商人名鑑第一回後編』(山口晋一、明治四四年三月)、(3) 山口晋一『諸官省用達商人名鑑第二回前編』(山口晋一、大正二年一月)の三書が現存し、①は東京本館書庫及び関西館総合閲覧室、②③は東京本館のみに収蔵しているものの、他の図書館には所蔵が確認出来ない稀覯本である。その中でも井上商店に関する記述は、②『第一回後編』と、③『第二回前編』に見られる。そのため本シリーズから、明治後期と大正初期における井上商店の經營状況を把握することが可能である。

まず『諸官省用達商人名鑑第一回後編』では、井上商店が「和洋織物及医療機器商」として掲載されている。それには、

井上商店

東京市京橋区尾張町新地八番地にあり、和洋織物、医療器械、繙帯材料、雑貨類を営む。其繙帯材料製造工場は小石川区日向町二番地に、医療器械製造工場は本郷区駒込神明町三番地にあり、主なる用達官衛は陸軍衛生材料廠、東京通信管理局、各師団衛戍病院、横須賀海軍病院等なり。

……(中略)……次で三十七八年役起るや浅草の山崎染工場(今の東京染織会社)と共同して茶褐色雲齋類を近衛、第一の両師団及び被服廠に納品し、雑貨業者としては東京砲兵工廠に入出し、又衛生材料廠の御用に対しては如上の小石川に繙帯材料工場を、本郷に医療器械工場を創設し、各品に対する専門家を主

任とし、最も確實強固に業務を営めり。(1) 専売特許縮織縞帯は戦役後陸軍衛生材料改正に際し、改正委員の諸説を参照して、店員宮田芳三氏と共に苦心發明したるものにして、目下陸軍薬局方の規定品たるなり。

とあり、井上商店が幕末における藩邸や幕府の御用達から出発し、明治維新後は兵部省の御用商人となったとある。

前稿で紹介した『京浜実業家名鑑』では「数年の間苦心計画し、種々の経験を嘗め、茲に始めて其織方に一新機軸を開きて之れを世に公にせり」とあるように、井上商店が新機軸の縞帯を開発したと記されているが、『諸官省用達商人名鑑』では井上商店の店員・宮田芳三の發明であると明記されている。

旧日本陸軍では、日露戦争が始まった明治三十七年以後、革脚絆に代わって巻脚絆(巻ゲートル)が採用され、将兵に普及している。井上商店では明治三十八年以後、衛生材料廠の御用にに応じて小石川区小日向町に縞帯材料製造工場を創設している。この縞帯材料製造工場は、恐らく医療品としての縮織縞帯のほか、巻脚絆の製造も想像される。縮織縞帯發明の井上商店の縞帯材料製造工場であるから、医療用包帯のほか縮織縞帯製の巻脚絆も考えられるが、そこまでは確認出来ない。縮織縞帯は「陸軍薬局方の規定品」とあるので、少なくとも医療用包帯として使用されていたのであろう。

次に傍線部にある、伸縮縞帯を發明した井上商店店員の宮田芳三について検討したい。

二 井上商店店員・宮田芳三について

宮田芳三については、青年時代の井上紅梅と親交が深かった寺田寅彦の日記からも彼の存在が断片的にうかがえるが、正確な姓名名では判らなかつた。しかし『諸官省用達商人名鑑』の発見によって、宮田芳三は商店の専売特許・伸縮縞帯を發明した井上商店の功労者であつたことが判明した。

しかも、当初は井上紅梅が井上商店の店主となる予定であつたが、(先代井上安兵衛の判断で)最終的には宮田芳三が二代目井上安兵衛を襲名し、続編となる『諸官省用達商人名鑑 第二回前編』¹⁾には、新しい井上商店店主となつた宮田芳三の経歴が詳しく掲載されている。以下『諸官省用達商人名鑑 第二回前編』記載の芳三に関する経歴を紹介すると、以下の通りである。

▲店主井上安兵衛氏は(2)明治十四年三月神奈川県橘樹郡橘村に生れ、同二十七年井上商店に入る、其在店中店務の餘暇早稲田大学講義録に依り文学科及歴史科を修め校外試験を受けて其に卒業せり、(3)彼の日露の戦役起るや氏は店務整理として店主を輔け大に業務の發展に資し、明治四十四年望まれて養子となり、先代の没するに及び襲名す。(4)氏は元の姓名を宮田芳之と云ひ、(5)日露戦役後陸軍衛生材料改正に際し、改正委員の諸説を参照し陸軍薬局方の規定品たるに至れる専売特許縮織縞帯を製出せり、(6)氏は又た文学に興味を有し宮田稜々の名を以て著述をなしたるは皆其店員時代の餘暇に成れるもの也。

まず、彼の姓名であるが、傍線部（４）に芳三の本名は「宮田芳之」とある。ただ、経歴紹介文の最後には「此間当時の店員宮田芳三氏即ち現店主の努力極めて大なるものあり」とあり、「宮田芳之」なのか「宮田芳三」なのか判断に苦慮する。

ただ①明治四四年版『諸官省用達商人名鑑 第一回後編』には「宮田芳三」とあること、②寅彦の日記でも、彼の姓名は「宮田芳三」、「宮田芳蔵」^{〔五〕}もしくは「宮田由蔵」^{〔五〕}と表記がぶれている。これは恐らく寅彦自身も宮田の本名の漢字表記を知らなかったためと推論できるが、いずれも読みは「よしぞう」であり、「宮田芳之」という記載は管見の限りでは一例も確認できない。そのため、傍線部の通り本名が「宮田芳之」であったとしても、井上商店での通称が「宮田芳三」だったと推論できよう（混用を避けるため、以下「芳三」として統一する）。

芳三は傍線部（２）の通り、明治一四年三月神奈川県橋樹郡橋村生まれとあり、紅梅と同年の出生であることがわかる。また芳三が井上商店へ来たのは一三歳、紅梅が井上商店に養子として招かれたのは、紅梅自身の記録によると明治二〇年四月七日^{〔五〕}であるので、芳三が井上商店を訪れたのは紅梅の七年後ということになる。養父の勧めで「商業学校」^{〔六〕}に入学したものの中途退学した紅梅に比べ、芳三は井上商店勤務の傍ら早稲田大学講義録で勉学に励み、校外試験を経て無事卒業している点は対称的である。

このような芳三であるが、紅梅と同じ趣味を持っていた。青年文学雑誌への投稿である。これは傍線部（６）にあるように、芳三は文学を趣味とし、「宮田稜々」^{〔七〕}の筆名で文学雑誌への投稿を盛んに行っていたとある。

芳三は、「宮田芳蔵」「宮田稜々」「稜々子」「稜々」等の様々な筆名を用いているが、井上紅梅とともに、青年時代から文学雑誌の常連として有名であった。傍線部には店員時代の「餘暇」に著述したと言いが、この表現は適当ではない。宮田の創作活動は極めて旺盛で、その投稿実績を見ると「餘暇」どころか、寸暇を惜しんで没頭した姿がうかがえる。

寺田寅彦の随筆「銀座アルプス」によると、寅彦が井上商店に下宿した明治三二年当時から「年の若い店員の間には文学熱が盛んで、当時ほとんど唯一であったかと思われる青年文学雑誌「文庫」の作品の批評をしたりしたことであった」^{〔八〕}とある。既に拙稿で紹介している通り、井上紅梅は著名誌である『文庫』（少年園・内外出版協会）や『新声』（新声社）へ盛んに投稿し、投稿開始から二年間で実に合計一回（『文庫』五回・『新声』六回）もの入選^{〔九〕}を果たしている。ただ寅彦によると、井上商店での文学熱は「若い文学少年たち」^{〔十〕}によるとあり、紅梅以外の文学少年の存在が推測できるが、それこそ『諸官省用達商人名鑑』で伸縮繃帯を発明したと紹介された宮田芳三である。

寅彦の日記でも芳三は、紅梅と共に行動している様子^{〔十一〕}がうかがえ、井上商店で紅梅のトランプ仲間として（宮田）稜二^{〔十二〕}なる人物が散見される^{〔十三〕}。しかし、寅彦の日記に紅梅が頻繁に登場する一方、芳三に関して記した記事はその数分の一にすぎないこと。また紅梅が井上商店に居住している頃は、寅彦も足繁く井上商店に通っているが、紅梅が井上商店を去ったあとは、寅彦の井上商店訪問が大きく減少したところからも、寅彦と芳三とは、（紅梅に比べれば）親密な関係ではなかったらしい。

前述の通り、芳三と紅梅は同年の出生であるが、芳三の文学雑誌への投稿は紅梅よりも早い。紅梅の初入選が明治三二年六月の「遊獵」(『新声』四卷六号)であるのに対し、芳三は一年早く明治三〇年六月に雑誌『穎才新誌』で初めて掲載され、同年八月には『小文庫』に「驟雨」が入選^{〔七七〕}している。『穎才新誌』は、一八七七年陽其二が創刊した本邦最初の少年少女向け全国雑誌であり、『小文庫』は少年園が一八八八年に創刊した有力雑誌で、当時の少年雑誌の双璧をなしていた。また後に『文庫』へ掲載されたときには、雑誌選者が「嘗て『小文庫』に於て作者の名を見たり、追々こつちへ切込むるは左もあるべし」^{〔七八〕}とあり、当初から一目置かれる存在であったに違いない。しかし、芳三のその後の文筆活躍は、選者の予想を遙かに上回るものとなった。

例えば青少年文学雑誌『文庫』^{〔七九〕}は「編輯机上毎月新に集まる所の寄稿、論文、小説等を合せば、実に五百乃至七百編の多きに達す。若夫れこれに、俳句、和歌、詩等の短簡なるものを加ふれば、其数幾千なるを知らず」(『文庫』明治三〇年二月号)とあるように、全国から膨大な数の投稿作品が集まり、入選に至るには十数倍〜数十倍の競争を勝ち抜かなければならないが、芳三はその難関雑誌に毎月のように入選している。

管見の限りに於いてその入選歴を紹介すると、左掲の通りである。

筆名 作品名及び掲載雑誌

- 宮田芳藏 「驟雨」(『穎才新誌』一〇二九号、明治三〇年六月)
- 宮田芳藏 「驟雨」(『小文庫』二卷六号、明治三〇年八月)^{〔二七〕}
- 宮田稜々 「薬師堂の額」(『新声』四編一号、明治三二年一月)

- 宮田稜々 「梅圃の月」(『新声』四編三号、明治三二年三月)
- 宮田稜々 「さくら塚」(『新声』四編五号、明治三二年五月)
- 宮田稜々 「尺八」(『文庫』九卷五号、明治三二年五月)
- 宮田稜々 「神の松」(『二葉集 青年文叢』明治三二年五月)^{〔三二〕}
- 宮田稜々 「帰郷(日記節録)」(『文庫』一〇卷一号、明治三二年六月)
- 宮田稜々 「清沢の一夜」(『新声』四編六号、明治三二年六月)
- 宮田稜々 「流れ百合」(『新声』四編六号、明治三二年六月)
- 宮田稜々 「あさがほ」(『文庫』一〇卷二号、明治三二年七月)
- 宮田芳藏・井上進 「緑陰小話」(『文庫』一〇卷三号、明治三二年八月)
- 宮田稜々 「不動堂(第貳等賞)」(『新声』五編二号、明治三二年八月)
- 宮田稜々 「枯れたちばな」(『新声』五編三号、明治三二年九月)
- 稜々子 「骨うつ声」(『文庫』一〇卷五号、明治三二年一〇月)
- 稜々子 「追懐記」(『文庫』一〇卷六号、明治三二年十一月)
- 宮田稜々 「つつみ石」(『新声』五編五号、明治三二年十二月)
- 宮田稜々 「巻首 在京誌友懇話会概況」
- 宮田稜々 (『新声』五編六号、明治三二年十二月)
- 宮田稜々 「地藏まゆ(懸賞小説)」(『桜洲之青年』二号、明治三二年一月)
- 宮田稜々 「悼春翠君長逝」(『桜洲之青年』二号、明治三二年一月)
- 宮田稜々 「塩田緑葉」(『桜洲之青年』二号、明治三二年一月)
- 宮田稜々 「てまり歌」(『桜洲之青年』三号、明治三二年一月)
- 宮田稜々 「百合とり」(『桜洲之青年』四号、明治三二年一月)
- 宮田稜々 「雪の山路」(『新声』新一編一号、明治三二年一月)
- 稜々 「帰り花」(『文庫』一卷四号、明治三二年二月)
- 稜々 「川崎紀行」(『文庫』一卷六号、明治三二年三月)
- 稜々 「行く春」(『文庫』一二卷二号、明治三二年五月)

- 宮田稜々 「おぼろ夜」(『新声』新一編五号、明治三二年五月)
- 宮田稜々 「故園の一日」(『新声』新一編六号、明治三二年五月)
- 稜々 「夏虫」(『文庫』一二卷五号、明治三二年七月)
- 稜々 「枯れ海松」(『文庫』一二卷六号、明治三二年八月)
- 宮田稜々 「葭簀小屋」(『新声』新二編三号、明治三二年九月)
- 稜々 「枝豆売り」(『文庫』一三卷三号、明治三二年一月)
- 稜々 「寒古鳥」(『文庫』一三卷五号、明治三二年一月)
- 宮田稜々 「寺の灯」(『新声』新三編一号、明治三三年一月)
- 稜々・春酔「心ばえ」(『文庫』一四卷三号、明治三三年三月)
- 稜々・春酔「心ばえ」(二) (『文庫』一四卷四号、明治三三年三月)
- 稜々・春酔「心ばえ」(三) (『文庫』一四卷五号、明治三三年四月)
- 宮田稜々 「黄楊の櫛」(美文 第三等賞図書切符一円) (『新声』新三編五号、明治三三年四月)
- 稜々子 「植民の目的を論ず」 (行政学会『行政』一五号、明治三三年六月)
- 稜々 「水泡」(『文庫』一五卷二号、明治三三年七月)
- 宮田稜々 「蚯蚓の声」 (『少国民』第一二二四号、明治三三年一月) (二二)
- 宮田稜々 「雪仁王」(『少国民』第一三二二号、明治三四年一月) (二三)
- 宮田稜々 「花百合物語」(『少国民』第一三三八号、明治三四年四月) (二四)
- 宮田稜々 「張子房」(『少国民』第一三九九号、明治三四年四月) (二五)
- 宮田稜々 「氷賣り」(『少国民』第一三二一六号、明治三四年七月) (二六)
- 宮田稜々 「新農夫」(『文庫』一八卷三三号、明治三四年九月)
- 宮田稜々 「小説 鬼灯」(『文庫』一八卷五号、明治三四年一〇月)
- 宮田稜々 「小説 蘆の花」(『文庫』一九卷一、二号、明治三四年十一月)

宮田稜々 「熊捕り太郎」
 (福田滋次郎編『勢揃ひ 短篇奇談』晴光館、明治三四年一月)

稜々 「松の露」(『文庫』二三卷二号、明治三六年五月)

宮田稜々 「熊捕り太郎」
 (福田滋次郎編『短篇小説集』晴光館書店、明治三七年一月)

稜々子 「骨うつ声」(石井稻三編『当代名家小品集』明治三八年九月)

稜々 「松風会雑感」(『文庫』三一三卷四号、明治三九年五月)

宮田稜々 「洪水記」(『詩人』五号、明治四〇年一〇月) (二七)

宮田稜々 「銀座の柳」(『文庫』三七卷五号、明治四一年九月)

芳三の投稿の傾向としてまず言えるのは、「短期集中」である。例えば明治三一年には一八件、三二年にも一六件と超人的とも言える入選数を誇っている。

その多作ぶりは紅梅を凌駕する。青少年文芸雑誌への通算入選数を見ると、紅梅が一九本の入選(明治三一年〜三八年)に対し、芳三は四〇本(明治三〇〜四一年)と紅梅の二倍以上である。しかも、紅梅には見られない懸賞小説にも三度受賞しており、文字通り質量ともに紅梅を圧倒する実績を誇っている。

右記の通り彼の作品は極めて多種多形であり、残念ながら小論では作品内容を紹介する紙数は残されておらず、内容は別稿にゆずらざるをえない。ただ、この種の作品には選者の寸評が添えられており、彼の文学活動に対する評価を知ることができる。その寸評の過半は辛辣な評言で占められるのが現状(二八)であったが、芳三の作品に対する寸評には、

——着想凡ならず、前途に望める作家なり^{〔三十九〕}

——稜々子の作、一篇出づる毎に必ず進跡あり、前途真に刮目すべし^{〔三十九〕}

——文才凡にあらず、休まず文を練ると共に、修養を積まれなば、天晴れ剛の者となるべし。余最も君の将来に望を属す^{〔三十二〕}

——多くの寄稿家の中において、推敲に苦心すること作者の如きは稀なりと思はる。余毎号原稿の検閲、添削に従事するに、某々二三子の寄稿を除きては、文才甚だ嘆美すべく、推して傑作といふべきものもありても、全く加減の必要なきもの殆ど稀れなり^{〔三十二〕}

と絶賛に近いものが少なくない。紅梅の寸評も決して悪いものでは無かったが、ここまで高い評価を受けてはいない。

そのため、芳三は青年文学雑誌界では広く知られた存在であった。例えば文芸誌『新声』の誌友懇話会の開催報告を参加者代表として執筆しているほか、明治三十九年には自らが編纂した『花かつみ』^{〔三十三〕}を自費出版、更に、福田滋次郎編『勢揃ひ 短篇奇談』では、泉鏡花（「立春」）や徳田秋声（「新しき果」）などのそうそうたる執筆陣の仲間入りを果たしている。

この芳三は、紅梅の関係も良好であったと思われる。それは、紅梅と芳三との合作「緑陰小話」が『文庫』^{〔三十四〕}に掲載されている事からも理解できるし、また明治三十一年一月に開催された文学雑誌『新声』の懇話会に常連の芳三が招かれたが、その時には紅梅も列席している。これは恐らく芳三の好意によるものであろう。

その後、芳三から遅れること一年にして紅梅は『新声』誌に初入

選^{〔三十五〕}すると、芳三と白熱した創作競争を繰り広げることとなる。

紅梅の投稿作品「鱧鮎賣」（『文庫』一一巻一号）^{〔三十六〕}にある選者・五十嵐白蓮の寸評に「君と『骨うつ声』の作者稜々子とは、ひとついへの内に起きふし、て情同胞の如しとか風の便りに聞きたるが、作文の力も今伯仲の間にあり。やがてどちらが前になり玉ふか、暫くおもしろき競争と申すべし」とコメントしている通り、二人は良きライバルの間柄であったのだろう。

（表1）紅梅の文学誌投稿と寺田寅彦来訪の経緯

明治三〇年六月	芳三文学誌初入選
明治三二年六月	紅梅文学誌初入選
明治三二年十一月	在京新声誌友懇話会
明治三二年夏頃	寺田寅彦井上商店に下宿開始

なお、筆者は前稿において「その紅梅に文学熱をかきたてる契機となったのが、後に物理学者・随筆家として活躍する寺田寅彦との親交である……寅彦が井上商店に訪れ、紅梅らに俳句の手ほどきをすることもあった。このように紅梅は、多感な青年期に、寅彦を介して漱石や子規という文学思潮を吸収し、文学誌への投稿に磨きをかけていった」^{〔三十七〕}と述べ、紅梅の文学熱は寅彦の来訪によってかきたてられたと考えていたが、この宮田芳三の出現によって、この点は修正が必要となった。

寺田寅彦の東京帝国大学理科物理学科入学に伴う井上商店来訪は、明治三二年夏である。しかし紅梅の文学誌初入選は明治三十一年六月であり、紅梅の投稿活動は寅彦の訪問の一年以上前から行われている。そのため、寅彦の井上商店来訪は、紅梅の文学熱を促進することはあっても、寅彦の訪問自体が、紅梅の文学熱を生み出したの



猶興舎印行

者席列會話懇友誌聲新回二第

〔写真1〕第二回在京新声誌友懇話会の記念写真（明治31年11月）



〔写真2〕写真1の拡大写真
前列右が井上紅梅
後列左が宮田芳三

ではない。寧ろ今回の考察の結果によれば、紅梅の文学熱を生み出す契機として宮田芳三の存在が大きかったに違いない。

明治三十一年一月二七日、九段坂下の玉川邸で開催された「第二回在京新声誌友懇話会」の来会列席者の記念写真が、『新声』一編一号に掲載されている。その集合写真には宮田芳三と、商業学校を病氣中退したばかりの紅梅青年が写っている。これまで井上紅梅の写真は、昭和一四年撮影の写真（紅梅五九歳）が一葉のみ確認^{〔三十八〕}されているにすぎず、青年時代の写真は今回初めての発見である。

写真撮影した明治三十一年一月の時点で、芳三は実に一六件という堂々たる入選実績を持つ。しかし、一方の紅梅はまだ五ヶ月前に作品が初入選したばかりで、殆ど入選実績がなかった。その無名の紅梅をわざわざ青年文士の会合に誘った点を見ても、紅梅の文筆活動の最初期に於いて、全国紙の懸賞論文で屈指の成績を収めていた宮田芳三の存在は決して小さいものではなかったであろう。

宮田芳三は、もともと井上商店に住み込みで働く一店員に過ぎず^{〔三十九〕}、井上紅梅こそが井上商店の後継人として教育されていたが、（先代）井上安兵衛は、最終的には井上紅梅を「廃嫡」とし、代わって宮田芳三を養嗣子として井上家に招き、二代目井上安兵衛を襲名させた。寅彦宅にも訪問する様子が日記に記録されているが^{〔四十〕}、

なぜ紅梅が廃嫡となり、代わって芳三が選ばれたのか、その経緯は紅梅による断片的な記録^{〔四十二〕}しか残っていない。しかも事情を知る紅梅も、その経緯を多く語っていないので、詳細は不明であった。しかし前掲『諸官省用達商人名鑑 第二回前編』傍線部(3)(5)にも記されている通り、日露戦争時における芳三の卓越した店務実績、そして宮田芳三の発明である伸縮繃帯が陸軍薬局方の規定品に認定されたという二点が、「井上商店の後継者には養子の井上紅梅よりも寧ろ宮田芳三が適当」と、初代井上安兵衛の判断を変える契機となったのである。

三 宮田芳三店長就任後の井上商店について

紅梅と芳三のその後について、紹介しよう。

上述の通り、井上商店の創業者である初代井上安兵衛は、当初紅梅を養子として迎えた。『諸官省用達商人名鑑』にある通り、安兵衛は弘化元年の生まれであり、紅梅が養子に来た時点で養母は四〇歳を超え^{〔四十二〕}、寅彦も明治三四年の時点で紅梅の養父母を「老夫婦」と表現^{〔四十三〕}している。安兵衛にとって世代交代の問題は、相当深刻な問題であったに違いない。しかしながら紅梅は、商家の見習い奉公も商業学校入学も、何れも病弱のために中途で挫折してしまう。そしてその後は商業よりも文学雑誌への投稿に没頭する毎日であった。養父はそれを見て、紅梅は商店の後継者には不向きとして「廃嫡」とし、彼を井上商店を離れ、湯島天神町に転居させている。そして養父は、伸縮繃帯を発明し陸軍薬局方の規定品を生み出した宮田芳三を抜擢、明治三八年頃に改めて養子縁組を行い、宮田は二代目井



井上商店

〔写真3〕『諸官省用達商人名鑑』（明治44年版）掲載の井上商店

上安兵衛こと井上由蔵に改名する。二代目襲名と時期を同じくして同年一〇月には井上商店の改装工事が行われているのが、寅彦の日記からも確認^{〔四十四〕}できる。

なお『諸官省用達商人名鑑』には、明治四四年版と大正二年版に掲載された井上商店店舗の外観が異なり、大正二年刊には三階部分が増築されている。この増築については、寅彦が明治四一年二月二日の日記に記載している^{〔四十五〕}。そのため『諸官省用達商人名鑑 第一回後編』に従って明治四四年以降に増築と考えると寅彦の日記内容とやや矛盾する。日記は同時代史料であるため、史料の正確性は高い。そのためここでは寅彦の日記に従い、明治四一年に増築が行われたが、増築後の店舗の写真がなかったため明治四四年版『諸官省用達商人名鑑』には、増築前の店舗の写真が掲載され、その後大



〔写真4〕『諸官省用達商人名鑑（大正2年版）』
掲載の井上商店（右上は二代目井上安兵衛）

正二年版になってようやく増築後の店舗が掲載されたと判断したい。本論で取り上げた『諸官省用達商人名鑑』の緒言にある通り、取材は明治四四年初頭に行われている。この時点では創業者の井上安兵衛が健在で、宮田芳三はまだ店員として紹介されているが、紅梅の回想では明治四四年に六七歳で井上安兵衛が死亡したとあり〔四十六〕、明治四五年一月三日付の寅彦の日記には井上由蔵が井上安兵衛を襲名したとある〔四十七〕。これで井上商店の世代交代は無事完了したが、廃嫡後も未精算であった店の商権と資産負債は、すべて井上由蔵（宮田芳三）に譲渡することとなり〔四十八〕、これによって紅梅は一気に経済的に逼迫したという（逆に言えば、廃嫡後もある程度井上商店の商権や資産は紅梅に与えられていたと推論できる）。そして紅梅は四歳の息子を井上商店に残し〔四十九〕、大正二年夏上海

（表2）紅梅の廃嫡から二代目井上安兵衛死亡までの経緯

明治三八年	紅梅井上家から廃嫡 宮田芳三が井上家と養子縁組
明治三八年一〇月	井上商店改装工事
明治四四年三月	『諸官省用達商人名鑑 第一回後編』刊行
明治四四年	初代井上安兵衛が死亡
明治四四年	紅梅井上商店の商権と資産負債を井上由蔵に譲渡
明治四五年一月	井上由蔵が井上安兵衛を襲名
大正二年一月	『諸官省用達商人名鑑 第二回前編』刊行
大正三年八月頃	二代目井上安兵衛が肺病発症
大正七年五月	二代目井上安兵衛が死亡

に渡航。後に上海の邦字新聞者の新聞記者として腰を落ち着けることとなる。そして中国人新聞記者や上海在住の中国人小説家との交遊を通じて、中国風俗研究や中国小説研究へと傾倒してゆくこととなるが、この話は別稿に譲ることとしたい。

これまで述べてきたとおり、宮田芳三のもとで新体制となった井上商店であったが、その直後に大きな不幸に見舞われている。

大正三年一〇月一五日、紅梅の息子の五歳のお祝いに妻に反物を持たせた寺田寅彦は、井上商店の意外な事実を知った。

当日の寅彦の日記には「芳藏は肺疾にて月嶋海岸病院に入院中の由なり。嫁はヒステリー症らしく里にて養生中の由」〔五十一〕とある。寅彦自身、二ヶ月ほど前の八月二二日に井上商店を訪問しているが、その時には安兵衛の肺病の記録は見えない。そのため、二代目井上安兵衛は大正三年八月以後に肺病を発症したのであろう。翌年一月二四日には初代井上安兵衛未亡人が死去〔五十二〕、その三年後となる

大正七年五月一六日、二代目井上安兵衛が三八歳で死亡する〔五十二〕、明治四五年、井上由蔵が井上安兵衛を襲名して実働期間は僅か三年、闘病生活四年弱の果てであった。

大正七年五月二〇日付の寅彦の日記には、「四時井上に行き見て見舞を述べ、金蔵君の外は昔の馴染はあらず、進氏の息九歳なるが、寄辺なげなるも哀れなり。明日高田万蔵院にて葬儀の筈」〔五十三〕とあり、翌日行われた葬儀に参加した記録は残っていない。ここでは九歳に成長した紅梅の実子が見えるが、その後の井上商店の足取りについては、井上紅梅自身は管見の限りに於いては何も書き残していない。唯一残っているのは、昭和八年二月に発表した寅彦晩年の回想である。その回想を紹介して本論の最後としたい。

震災以後の銀座には昔の「煉瓦」の面影はほとんどなくなつてしまった。第二の故郷の一つであったIの家（筆者注…井上商店）はとうの昔に一家離散してしまつたが家だけは震災前までだいたい昔の姿で残っていたのに今ではそれすら影もなくなつてしまひ、昔帳場格子からながめた向かいの下駄屋さんもどうなつたか、今三越のすぐ隣にあるのがそれかどうか自分にはわからない。……足もとの土でさえ、舗装の人造石やアスファルトの下に埋もれてしまつているのに、何をなつかしむともなく、尾張町のあたりをさまよつては、昔の夢のありかを捜すような思いがするのである〔五十四〕。

結語

以上、本稿では国立国会図書館で発見された『諸官省用達商人名鑑』所載の井上商店に関する記事に注目し、紅梅の事跡を語る上で、必要不可欠な井上商店の動向や、紅梅と同様に文学創作に傾倒した宮田芳三について分析を試みた。内容を要約すると以下の通りである。

I 「諸官省用達商人名鑑」によると、井上商店は、幕末に藩邸や幕府の御用達として出発、そして明治維新後は兵部省の御用商人となり、明治三七～三八年の日露戦争の際には、更に事業を拡大し、自前で繙帯材料製造工場・医療器械製造工場を創設し、商取引のみならず医療品の製造にも事業を拡大していた。

II 井上商店の店員で伸縮繙帯を発明した宮田芳三は、明治一四年三月神奈川県橋本郡橋村生まれで、一三歳から井上商店で勤務し、井上商店勤務の傍ら早稲田大学講義録で勉学に励み、校外試験を経て卒業している。また彼は青年文学雑誌の常連として知られており、紅梅の文筆活動を遙かに上回る活躍を示した。芳三は無名の紅梅をわざわざ青年文士の会合に招き、時には紅梅と芳三の連名で作品を投稿するなど、良きライバルの間柄であったことが理解できる。紅梅の文筆活動の最初期に於いて、全国紙の懸賞論文で屈指の成績を収めていた宮田芳三の存在は決して小さいものではなかった。

III 初代井上安兵衛は、陸軍薬局方規定品に認定された伸縮繙帯を発明した宮田芳三の才能を見込んで、「井上商店の後継者には養子の井上紅梅よりも寧ろ宮田芳三が適当」と判断。井上紅梅を商店の後継者には不向きとして廃嫡とする一方、芳三と明治三八年頃に養子縁組みを行い、宮田芳三は井上由蔵に改名する。これにより芳三

井上紅梅の養家と宮田芳三について——井上紅梅に関する事跡研究の一環として——

は二代目井上安兵衛を襲名し、懸案であった井上商店の世代交代は完了した。しかし、廃嫡後も未精算であった店の商権と資産負債は、その後すべて井上由蔵（宮田芳三）に譲渡したため、紅梅は生活の糧を奪われる結果となり、大正二年夏上海に渡航し、上海の邦字新聞社の新聞記者に就職することとなる。

VI 宮田芳三のもとで新体制となった井上商店であったが、井上安兵衛襲名三年後には肺病で入院、四年弱の闘病生活の後に二代目井上安兵衛が死亡し、その後程なくして井上商店は一家離散することとなった。

以上が『諸官省用達商人名鑑』による井上商店の顛末である。如上の経緯で井上商店から追い出されるように上海に渡航した紅梅は、支那風俗研究会のもとで文筆活動を展開し、後には白話小説の翻訳を手掛けることとなるが、その詳細については別稿に譲ることとしたい。

本稿は、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）「戦前期において支那愛好者が果たした文化受容活動の実証的研究」の研究成果の一部である。

注

- 【一】 拙稿「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について——明治時代から大正時代までの翻訳事業を中心として」（『国際文化研究科論集』一四号、二〇〇六年）、同「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について——一九一〇年代～二〇年代の動向を中心と

して」（『国際文化研究科論集』一四号、二〇〇六年）、同「白話小説翻訳史における宮原民平の存在について——『支那文学大観』の事例を中心に」（『アジア遊学』一〇五号、二〇〇七年）、同「中国通俗文芸受容史における翻訳文体の問題について——佐藤春夫の『百花村物語』を中心として」（『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』燎原書店、二〇〇八年）、同「支那に浸る人——井上紅梅が描いた日中文化交流」（『から船往来——日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』中国書店、二〇〇九年）、同「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について——村松映・魚返善雄の翻訳と翻訳層の交代について」（『国際文化研究科論集』一七号、二〇〇九年）、同「日本伝統文化の形成を「訓読」から考える——近代日本における白話小説の文体」（『訓読から見なおす東アジア』東京大学出版会、二〇一三年）参照。

【二】 三石善吉「後藤朝太郎と井上紅梅」（橋川文三他編『近代日本と中国（下）』朝日新聞社、昭和四九年）三五～三六頁参照。

【三】 井上進「わか草」（『文庫』一二巻一号、明治三三年四月）。

【四】 紅梅「紅い土と緑い雀」支那風俗研究会（大正一五年一月）、紅梅「過去の銀座と現在の上海」（『東洋協会編『東洋』昭和九年九月号）参照。

【五】 紅梅「支那随筆 暗殺の都・上海」（『週刊朝日』三五巻二号、昭和一四年一月）一八八～一九一頁参照。

【六】 紅梅前掲「支那随筆 暗殺の都・上海」一八七頁参照。

【七】 大正二年一月二日 印刷

大正二年一月二五日 発行

編輯兼発行者 東京市赤坂区溜池町八番地 山口晋一

印刷者 東京市京橋区弓町二四番地 金子久太郎

印刷所 東京市京橋区弓町二四番地 三協印刷株式会社

本書出版主任 山口晋一

【八】寅彦日記大正七年五月一九日条「井上安兵衛(旧芳藏) 去る一六日死去、明後二十一葬儀の由通知あり」『寺田寅彦全集(二〇)』一七五頁参照。

【九】寅彦日記明治四五年一月三日条「夕方井上由藏改め安兵衛年賀に来る」『寺田寅彦全集(一九)』二五一頁参照。

【十】紅梅「わか草」(『文庫』一二卷二号、一八九九年四月) 参照。

【十一】「十六歳の秋、又もや学問を修めしむむと商業学校に入れ給ひし」紅梅「愛宕山」(『新声』一編四号、一八九九年四月) 参照。相田洋氏は上記引用文の「商業学校」を高等商業(高商)ではなく、一般的な商業高校と推論している。相田洋「シナに魅せられた人々——シナ通列伝」(研文出版、二〇一四年) 一六八頁参照。

【十二】寺田寅彦「銀座アルプス」『寺田寅彦全集(三)』二七八頁参照。

【十三】掲載作品は以下の通り。

○「遊狐」『新声』四卷六号(明治三二年六月)

○「鶴が沼の夕」『文庫』一〇卷二号(明治三二年七月)

○「鶯が島の風」『新声』五卷一号(明治三二年七月)

○「緑陰小話」『文庫』一〇卷三号(明治三二年八月)

○「不在の声」『新声』五卷四号(明治三二年一〇月)

○「鱈鈍壳」『文庫』一一卷一号(明治三二年一月)

○「姿見の浜」『文庫』一一卷五号(明治三二年二月)

○「忍ぶ艸」『新声』一編二号(明治三二年二月)

○「わか草」『文庫』一二卷一号(明治三二年四月)

○「愛宕山」『新声』一編四号(明治三二年四月)

○「あやめ草」『新声』二編一号(明治三二年七月)

【十四】寺田寅彦「銀座アルプス」『寺田寅彦全集(三)』二七三頁参照。また

同じく「銀座アルプス」には「当時いちばん若かったKちゃんが後年ひとかどの俳人になって、それが現に銀座裏河岸に異彩ある俳諧おでん屋を開いているのである」とあり、「文学少年たち」は正確には三名の可能性もある。寅彦は大正七年五月二〇日の段階で井上商店の顔ぶれには「金藏君の外は昔の馴染はあらず」とある。この時点で井上商店では、寅彦の馴染みである初代井上安兵衛、二代目井上安兵衛(宮田芳藏)が死亡し、井上紅梅も上海滞在中であり、「当時いちばん若かったK」が「金藏君」である可能性は否定できない。『寺田寅彦全集(二〇)』一七五頁参照。

【十五】寅彦日記明治三七年一月二九日条「夜十時新橋着。井上より進氏と宮田氏迎に来る。一泊」『寺田寅彦全集(一八)』二八七頁参照。

【十六】寅彦日記明治三六年一月三日条「午前又進、稜二諸子とツランブ」『寺田寅彦全集(一八)』二四三頁参照。寅彦日記明治三六年一月七日条「井上に至る。進、稜二、二子共に不在。主人は昨日修善寺より帰宅せり」『寺田寅彦全集(一八)』二四四頁参照。

【十七】宮田芳藏「驟雨」(『穎才新誌』一〇二九号、明治三〇年六月) 六頁、宮田芳藏「驟雨」(『小文庫』二卷六号、明治三〇年八月) 五三六頁。

【十八】『文庫』(九卷五号、明治三二年五月) 四二八頁参照。

【十九】『文庫』創刊号(明治二八年八月) 裏表紙にある「『文庫』寄稿心得」の前文には「『文庫』は、中等教育の程度にある全国学生の季刊雑誌なり」とあり、初等教育を終え、高等教育に入る前の青少年を読者としている。

【二十】宮田芳藏「驟雨」(『小文庫』二卷六号、明治三〇年八月) は、製紙分社(東京印刷会) 編(『穎才新誌』一〇二九号、明治三〇年) 五三六―五三七頁の文章の字句を若干修正して採録したもの。

【二十一】宮田稜々「神の松」(『新声社編』『二葉集 青年文叢』明治書院、明治三一年五月) 五二頁参照。

井上紅梅の養家と宮田芳三について——井上紅梅に関する事跡研究の一環として——

- 【二十二】 宮田稜々「蚯蚓の声——(西洋お伽話)」(鳴皇書院『少国民』第一二年二四号、明治三十三年一月) 五九〜六九頁参照。
- 【二十三】 宮田稜々「雪仁王——(お伽話)」(鳴皇書院『少国民』第一二年二号、明治三四年一月) 三七〜四五頁参照。
- 【二十四】 宮田稜々「花百合物語——(お伽話)」(鳴皇書院『少国民』第一二年八号、明治三四年四月) 五三〜五六頁参照。
- 【二十五】 宮田稜々「張子房——(支那英傑傳)」(鳴皇書院『少国民』第一二年九号、明治三四年四月) 一一〜一九頁参照。
- 【二十六】 宮田稜々「氷賣り」(鳴皇書院『少国民』第一二年一六号、明治三四年七月) 一一〜一七頁参照。
- 【二十七】 宮田稜々「洪水記」(『詩人』五号、詩草社、明治四〇年一〇月) 四八〜五〇頁。
- 【二十八】 「掲載された作品の末尾には記者による評言が付され、……しばしば辛辣な評言を加えている。これに対して投書家から反論が寄せられることもあり、たびたび論争が展開されている」(関肇「文庫」解題——文学青年の共和国」(復刻版)・文庫 解題・総目次・索引」不二出版、二〇〇六年) 六頁参照。
- 【二十九】 稜々子「骨うつ声」(『文庫』一〇巻五号、明治三二年一〇月) の小島鳥水評。三八七頁参照。
- 【三十】 稜々「夏虫」(『文庫』一二巻五号、明治三二年七月) 五十嵐白蓮評。三七二頁参照。
- 【三十一】 稜々子「追懐記」(『文庫』一〇巻六号、明治三二年一月) 小島鳥水の評。五〇九頁参照。
- 【三十二】 稜々子「追懐記」(『文庫』一〇巻六号、明治三二年一月) 五十嵐白蓮の評。五〇九頁参照。
- 【三十三】 宮田芳三「花かつみ」(宮田芳三、明治三九年一月) 参照。
- 【三十四】 井上進・宮田芳蔵「緑陰小話」(『文庫』一〇巻三号、明治三二年八月二〇日) 参照。
- 【三十五】 紅梅「遊獵」(『新声』四巻六号(明治三二年六月))。
- 【三十六】 井上進「鱈鮓賣」(『文庫』一一巻一号、明治三二年一月)、四二〜四四頁参照。
- 【三十七】 拙稿「井上紅梅の研究——彼の生涯と受容史から見たその業績を中心として」(小説・芸能から見た海域交流』汲古書院、二〇一〇年) 一二五頁参照。
- 【三十八】 紅梅前掲「支那隨筆 暗殺の都・上海」一八六頁参照。
- 【三十九】 「新声」新三編五号(明治三三年四月) 掲載の「新声月桂冠」目次には、宮田芳三の住所が「京橋区尾張町新地八番地井上」とあり、彼の「帰郷(日記節録)」(『文庫』一〇巻一号、明治三二年六月所載) には、芳三の実家が「神奈川県橘樹郡橘村(現在の神奈川県川崎市高津区)」にあると明記されている。
- 【四十】 寅彦日記明治四五年一月三日条「夕方井上由蔵改め安兵衛年賀に来る」『寺田寅彦全集(一九)』二五一頁参照。
- 【四十一】 紅梅前掲「支那隨筆 暗殺の都・上海」一八七頁参照。
- 【四十二】 井上進「わか草」(『文庫』一二巻一号) に「細君四十を越えて子宝なく」という一文がある。
- 【四十三】 寅彦日記明治三四年二月三日条「寺田寅彦全集(一八)」一四〇頁参照。また「銀座アルプス」でも、安兵衛夫婦を「奥の間の主人主婦の世界は徳川時代とそんなに違わないように見えた」と述べている。寺田寅彦「銀座アルプス」『寺田寅彦全集(二二)』二七三頁参照。
- 【四十四】 寅彦日記明治三八年一〇月八日条「夜井上を訪ふ。店先改築工事中

なり」(『寺田寅彦全集(一九)』、二二頁参照。

【四十五】寅彦日記明治四一年二月二日条「午後井上へ土産物を持ち行く。二階を改築して体裁を改めたり。洋食の馳走になる」(『寺田寅彦全集(一九)』六一頁参照。

【四十六】紅梅前掲「支那隨筆 暗殺の都・上海」一八七頁参照。

【四十七】『寺田寅彦全集(一九)』二五一頁参照。

【四十八】井上紅梅前掲「支那隨筆 暗殺の都・上海」一八七頁参照。

【四十九】寺田寅彦の日記大正三年一〇月一五日条には、寺田夫人の寛子が紅梅の息子の「五つの祝」として反物持参していること(『寺田寅彦全集一九卷 三一四頁)、そして大正七年五月二〇日条にも、井上商店に「進氏の息九歳」が登場するところから(『寺田寅彦全集二〇卷 一七五頁)、紅梅の息子は井上商店に預けられていることが判る。

【五十】『寺田寅彦全集(一九)』三一四頁参照。

【五十二】「井上安兵衛未亡人昨夜死去の報あり、早速見舞に行く。香奠五円差出す」大正四年一月二四日条『寺田寅彦全集(二〇)』三五頁参照。

【五十二】「井上安兵衛(旧芳蔵)去る一六日死去、明後二十一葬儀の由通知あり」寅彦日記大正七年五月一九日条『寺田寅彦全集(二〇)』一七五頁参照。

【五十三】『寺田寅彦全集(二〇)』一七五頁参照。

【五十四】寺田寅彦「銀座アルプス」『寺田寅彦全集(三二)』二七八頁参照。